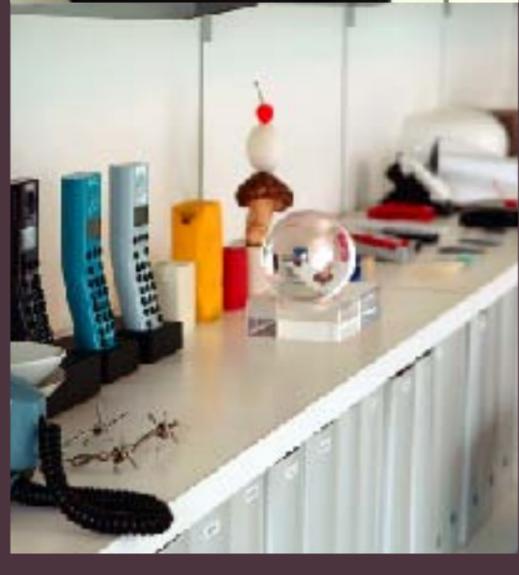
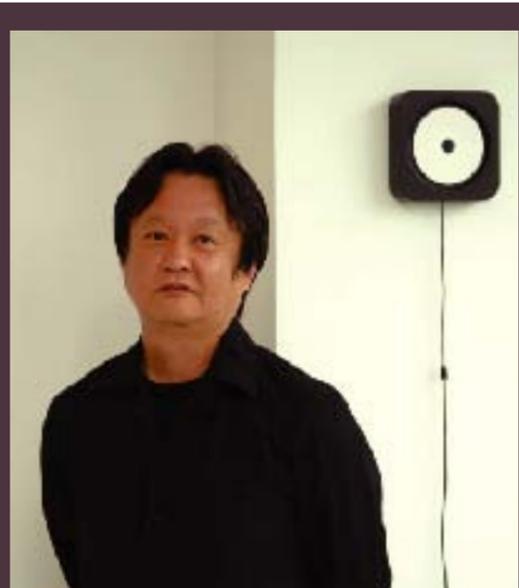


絵はあくまでも趣味だったという。そんな深澤さんが、美術大学への道を目指したきっかけは、高校三年の時に図書館で見た「蛭雪時代」の職業別進路特集だったという。「たまたま図書館で手にした本をめぐっていたら、工業デザイナーは『工業製品を通じて人を幸せにする仕事』だということが書いて

大学での勉強は大変だったが、デザインを考えるのが好きだったのでつらいと思っただけではないという。全国から集まった創造性に富んだ仲間と時間を忘れて切磋琢磨し、デザインに没頭した。「大学ではすべてが楽しかったですね。家電とか車とか、家具とか、全部デザインできるんだなあと思っただけ

飛び出して勝負してみたいという気持ちも強くなってきた。「このままメーカーにいたら、いずれマネージャーになり現場を離れなければならなくなる。世界には八十八歳、九十歳になっても現役です。いいデザインを生み出す人がいる。自分もそうなりたい」。英語がで

見つけて、心とお互いの関係をもっとオープンにしていこうと、他の県には真似できないような理想郷を創るポテンシャルはあるよね」と山梨県の大らかな可能性に期待する。世界を舞台に一流デザイナーとして活躍する深澤さんの目には、可能性に溢れた故郷の未来が見えているのかもしれない。



世界を舞台に活躍する工業デザイナーである深澤さん。深澤さんの名前は知らなくても、壁に掛けるCDプレーヤーや斬新なデザインが話題になった携帯電話「NFOBAR」は、多くの方が目にした覚えがあると思う。子どもの頃は体が弱かったため、外で遊ぶのに絵を描いてばかりいました。甲府市朝日で育った子ども時代を深澤さんはそう振り返る。絵の才能は当時から自他共に認めるところだったそうだ。

あったんですよ。その瞬間、ああこれだ、って思った」。工業デザイナーという言葉は良く分からずとも、「これは面白い」と感じたその日に、美術大学への進学を決めた。遅すぎるスタートだったが、難関であるからこそモチベーションになったというのは、深澤さんらしいエピソードだろう。

らワクワクした。絵を描くより製品をデザインする方が、自分の興味に向いていたんですね。多摩美術大学卒業後は、時計メーカーに就職し、新規開発のプロジェクトを一手に引き受けながら八年間デザイナーを務めた。デザインの世界がわかるにつれ、その奥の深さも見えてきて、世界に

NAOTO FUKASAWA

渡米し、デザイン会社に入社した深澤さん。先端技術のデザインを仕事とし、開発やコンサルティングを手がけた後に日本支社長として帰国することとなる。独立して海外に出たので、大きな会社の一デザイナーではゴールじゃない。ようやく五年前に独立ですから、結構時間がかかりましたけど」と、現在独立に至った経緯も語ってくれた。今や日本だけでなく、ヨーロッパの大手ブランドの仕事も多く手がける忙しい身だが、山梨に帰る機会も多いと言つ。「山梨には底力や知性がある。コンパクトにまとまっているし、東京からの適度な距離も最高」と故郷の魅力を語る深澤さん「自分たちの持つ豊かな自然や文化、歴史などを真剣に見つめて、心とお互いの関係をもっとオープンにしていこうと、他の県には真似できないような理想郷を創るポテンシャルはあるよね」と山梨県の大らかな可能性に期待する。世界を舞台に一流デザイナーとして活躍する深澤さんの目には、可能性に溢れた故郷の未来が見えているのかもしれない。

「工業製品を通じて人を幸せにする仕事」という言葉に魅力を感じた 深澤直人さん

YAMANASHI People

甲斐のひと、インタビュー

深澤 直人(ふかさわ なおと)

1956年甲府市生まれ。工業デザイナー。朝日小学校、甲府北中学校、甲府工業高校、多摩美術大学へと進学。諏訪精工舎(現セイコーエプソン株式会社)に8年勤務後、89年渡米し、デザインコンサルティング会社 DEOに勤務。帰国後、DEO日本支社を設立。2003年に独立し、Naoto Fukasawa Designを設立。「壁掛式CDプレーヤー」、携帯電話「NFOBAR」、「neon」、「加湿器」はニューヨーク近代美術館永久収蔵品に。過去のデザイン賞として米国 DEA金賞、ドイツ IF賞金賞、英国 D&AD金賞など、50賞以上。武蔵野美術大学教授、多摩美術大学客員教授。著書に「デザインの輪郭」、作品集「NAOTO FUKASAWA」。